



20年目のきょうも、
人と地球にやさしいアクション!

●発行: グリーンコープ共同団体理事会 ●編集: 共生の時代・編集部 ●〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8番36号博多ビル7階 TEL092(481)7923 FAX092(481)7876

共生の時代

日本の酪農を絶やさないうために びん牛乳をずっと飲み続けるために: ーびん牛乳の価格を改定し、生産奨励金を設置しますー

2003年11月グリーンコープは食べもの運動の到達点、象徴としての「びん牛乳」を誕生させました。びん牛乳のために専用工場まで作ったという、その誕生物語はずっと語り継がれてきています。

現在、石油依存から脱却するためにアメリカなどではバイオ燃料用の作物栽培を増大させたり、オーストラリアの干ばつなどの異常気象による食料・食料用の穀物収量の減少によって、穀物全体の価格が高騰しています。しかもそれに関連する穀物相場に投機が集中し、さらに値を引き上げています。それが酪農生産現場に波及し、今や日本の酪農は危機的状況にあると言えます。

そのような中、グリーンコープは「日本の酪農を応援したい」「理想のびん牛乳をずっと飲み続けたい」という思いを実現するために大きな決断をしました。生産奨励金を設置し、びん牛乳価格を改定することについて報告します。



理想のびん牛乳に至った理由と価格

グリーンコープは2003年11月、品質・内容・価格のいずれをとっても、ほんとうに自信の持てる「日本一」と言える「理想の牛乳」を作り出しました。その開発についてはいいねいに時間をかけて検討しました。そして、①日本では牛乳のほとんどが紙パックに充填され流通している②日

本にはごく小規模のものを除いて、「びん装」の牛乳工場そのものが存在しない③グリーンコープの規模で「びん牛乳」を開発しよう

酪農生産者と共にはんもののびん牛乳を守る

とすれば、1時間に1万本の充填能力が必要となるため、専用の牛乳工場の建設が必要となる、という事実を受け止め、ひるむことなく「理想の牛乳」の開発ーグリーンコープ専用牛乳工場の建設ーに踏み込むことを決定しました。

飼料価格の急騰など、酪農を取り巻く環境は厳しくなっています。そのため、私たちが「びん牛乳」を開発した時点で決めた原乳価格や製造費用を見直し、改定する必要が出てきました。さまざまな状況を鑑み、私たちが今後も継続してびん牛乳を飲み続けることができるために、びん牛乳の生乳生産者が今後も安定して酪農を続けられるために、グリーンコープ共同団体理事会は、新たに酪農生産者に届ける「生産奨励金」を設置することを決定しました。

①「びん牛乳工場」建設に必要な資金(4.6億円)を負担する②加えて、新設される工場と設備、それを運用するために必要な器具・備品などの減価償却コストを牛乳価格に反映させるなどの方法で負担する、という2点を決意しました。それを踏まえた上で、びん牛乳の価格をいねいに検討・決定しました。その際、関係者(酪農生産者・メーカー・グリーンコープ)にとつて過大な負担とならないよう、あらゆる努力を重ねました。同時に、組合員にと

って「できる限り購入しやすい価格」を追求しました。それが現在のびん牛乳の価格なのです。

酪農生産者と共にはんもののびん牛乳を守る

飼料価格の急騰など、酪農を取り巻く環境は厳しくなっています。そのため、私たちが「びん牛乳」を開発した時点で決めた原乳価格や製造費用を見直し、改定する必要が出てきました。さまざまな状況を鑑み、私たちが今後も継続してびん牛乳を飲み続けることができるために、びん牛乳の生乳生産者が今後も安定して酪農を続けられるために、グリーンコープ共同団体理事会は、新たに酪農生産者に届ける「生産奨励金」を設置することを決定しました。

伴って、カタログGREEN 9号(5/26からの配達分)から、ノンホモパステライズ牛乳、カフェミルクの価格を1本当たり13円、値上げすることを決定しました。

世界的な穀物価格の高騰が酪農生産者を襲う

ここ数年、原乳を生産するためのコストが増大しています。特にその約4割を占める飼料の価格が急騰しています。農林水産省の調査によると、2008年1月～3月期の配合飼料の価格は、2006年対比で3割前後、アップしています。その原因は、主要な飼料用穀物であるトウモロコシ価格の急騰によるものです。

①オーストラリアの大干ばつをはじめ、世界各地の異常気象によるトウモロコシの生産量の減少

②原油価格の高騰や二酸化炭素排出量を減らす動きに関連して、トウモロコシの主産地である米国でバイオエタノール生産向けのトウモロコシ需要が急増

③ブラジル、ロシア、インド、中国の急速な経済成長に伴う食料需要の増加などが原因だと言われています。

また、世界的な船舶輸送の需要増による船舶数の逼迫や原油価格の高騰などによる輸送費用の上昇も飼料価格に影響を及ぼしています。

原乳価格の仕組みとびん牛乳の価格改定

原乳の価格は、年1回の乳業メーカーと生産者団体との価格交渉によって決められています。そのような仕組みになっているのは、次のような理由からです。

①牛は毎日お乳を出すことから、搾乳も毎日必要

②牛乳は長期保存ができず、保存のためには乳製品に加工する必要がある

③生乳の流通・加工には一定規模の設備が必要であり、牛乳・乳製品の加工・販売は一部の大手乳業メーカーが大きなシェアを有している

④生産者は零細で数が多く、生産者団体を組織して価格交渉を行っている

このたび、生産者団体（九州生乳販連と乳業メーカー）（日本ミルクコミュニティ）

びん牛乳の製造費用の改定

グリーンコープ専用のびん牛乳工場ではびん牛乳を製造している日本ミルクコミュニティ（株）より、製造経費（燃料費、運送費、

設備・器具・備品の減価償却費用の改定

グリーンコープ専用のびん牛乳工場建設のための資金として、当時33万人組合員による「みるく出資金」を募り、充填機などの設備・器具・備品を設置しました。それらの設備は、グリーンコープの財産として、毎年、税法に基づいて償却（設備を設置した費用を経費として計上）しています。それは当然、商品価格に組み込まれています。その金額は、びん牛乳1本当たり約5円です。

設備等の減価償却費は、毎年減少していきます。グリーンコープが設備等を設置してから4年5カ月が経過していることから、設備

酪農生産者に直接届ける「生産奨励金」の新設

牛乳の消費が減少傾向にあったことから、国はここ数年、生乳生産を減少させる計画を実行してきました。従って、2007年度（2007年4月～2008年1月）の生乳生産量は前年対比1.3%の減少となっています。

さらに、飲用向けよりも低い価格で加工向けに出荷



グリーンコープのびん牛乳生産者も例外ではなく、経済的に酪農が継続できなくなつて廃業する農家もあります。このたび、生乳価格を1kg当たり約4円値上げすることが合意されました。が、一般的には、「酪農の経営が安定し、酪農を

農畜産物のような産直関係をめざす

グリーンコープは、農畜産物の「産直」をすすめてきました。それは、例えば青果物では、無農薬や減農薬などに差別化するだけでなく生産者が農業を継続できるような関係、農業経営の面からの経済問題を考えるという観点においても生産者と関係を作ってきました。その結果、グリーンコープの産直産地では、多くの場合、後継者が育ち地域ぐるみで農業を続けられる環境が整ってきています。

そして、青果物では、再生産が可能な価格を生産者と相談して決めています。米の産地にとって、有機栽培・赤とんぼA（無農薬）では実質的な価格が保全できる仕組みになっています。

産直たまご・産直若鶏・産直豚の価格には、飼料価格の変動を組み込んでいます。社会的には「穀物価格の高騰→飼料価格の高騰→畜産生産者の困窮」という構造になっていますが、グリーンコープの生産者はこの構造に入らずに安心して生産が続けられるようになっていきます。

一方、グリーンコープは酪農生産者と産直関係を作

た。しかし、原乳の生産と流通の仕組みにおいて、グリーンコープは直接酪農生産者から原乳を購入できません。また、原乳価格が生産者団体と大手乳業メーカーの交渉と合意によって一律に決められる中で、酪農生産者とはグリーンコープがめざす産直関係を構築することができませんでした。これまで、酪農生産者の指定、non-GMO飼料による飼育、組合員や子どもたちによる交流（タオルやメッセージを贈る「グリーンコープ生乳生産者交流会」や子どもたちの「酪農ホームステイ」など）を実施して相互の関係を作ってきました。しかし、酪農経営の継続という経済的観点からの産直関係は、構築できていませんでした。

このたび、グリーンコープは、生産者団体（九州生乳販連）から届けられた「値上げ」要請とは別に、積極的に酪農生産者との産直関係を強化する意味で新しい段階に一步踏み込むことにします。びん牛乳の組合員価格に「生産奨励金」を組み込み、グリーンコープの組合員から酪農生産者に直接届けることを決定しました。

酪農生産者が酪農を継続することができ

グリーンコープの「食べもの運動」の象徴である

「びん牛乳」を私たちが安定して利用していきけるように



乳業メーカーからのメッセージ

びん牛乳って
ほんとうに
うまいんです!



日本ミルクコミュニティ(株)
福岡工場長 田中 宏治さん

乳業メーカーの役割は、酪農生産者から届けられた生乳で安心・安全なびん牛乳を製造することです。そういう意味では生産者と組合員の皆様をつなぐ橋渡し役。目立たない黒子に徹して責任を持って仕事をやり遂げることだと思っています。しかし、人間ですから、ミスをしないという保障はありません。だからこそ、組合員の皆様の期待を裏切らないよう細心の注意を払って、びん牛乳製造にあたっています。

グリーンコープ様とわが社との出会いは必然であり、その大きな流れを受け入れて、大切に守っていくのが私の役目だと思っています。

私は日常的に工場の中で仕事をしていますから、消費者の皆様と直接会うことはありませんが、グリーンコープの組合員の皆様とは見学に来られた時、直接お話できる機会があります。産直びん牛乳の工場はグリーンコープ様の財産です。皆様の工場ですから、多くの組合員様に足を運んでいただき、産直びん牛乳のすばらしさを実感してほしいと思います。

牛乳の消費の落ち込みや飼料の高騰で、今、酪農の生産現場はとても苦しんでいます。そんな時だからこそ、支えあって一緒に頑張っていくことはとても大切なことです。

「びん牛乳って、ほんとうにうまいなあ」としみじみ思います。こんなにおいしい牛乳を、ぜひ多くの人に飲んでいただきたいと思います。私たちは、これからも一所懸命、そして自信を持って、産直びん牛乳を作っていきます。

今と未来の 確かな食べものの作りを めざすために



グリーンコープ共同体
代表理事 吉田 文子さん

組合員のみなさん、こんにちは。
この4月から日本全体で、大変多くの商品値上げが続いています。正直言って、家計を考えるとため息が出るような、とても重たい気持ちになります。一方、ニース等で値上げの原因が決して単純でなく、その要因は複雑に絡んでいることを知るにつれ、別の不安が大きく湧き上がってきます。多くの生産者が「値上げか、廃業か」の岐路に立たされています。また、日本は「飽食」でありながら自給率が信じられないほど低く、このままでは将来食べるに事欠く日がくるかもしれない、これは切実で深刻な不安です。

一つひとつは、「生命を育む確かな食べものを」という組合員の思いを基に、生産者やメーカー、グリーンコープが心と力を合わせて生み出しています。グリーンコープが誇る「グリーンコープ商品生産・製造認証システム」の監査報告からは、生産者やメーカーが「組合員の顔を思い浮かべてちゃんとした商品」と日々の記録をつけながら「安心・安全」を継続・実践している姿がしっかりと伝わってきます。私たち組合員にとって、生産者・メーカーの努力は本当に尊く有難いものです。

しかし、例えば牛乳の生産者からは「注文が少なく」と私たち酪農を続けたいけない「一人並みな暮らしができない収入では、後を継ぐ者がいるはずがない」などの深刻な苦悩や悩みも伝わってきます。「生命を育む食べもの」作りに報いる価格の保証、さらに安定した供給の仕組みを整えることは、組合員の思いであると同時にグリーンコープの責務です。

私たちにできることは何なのでしょう。今回のグリーンコープ独自の「生産奨励金」は、私たちが生産者を応援する気持ちを表わしたものです。

今と未来の確かな食べものを確保するために、これからもしっかりとびん牛乳を利用していきましょう。

酪農生産者からのメッセージ

これからも良質な原乳を届けます

産直びん牛乳のふるさと熊本県菊池地域、当該農協管内の約45戸の酪農生産者が原乳を作っています。それらの生産者と「酪農ホームステイ」や「グリーンコープ生乳生産者交流会（タオルを贈る取り組み）」などをとおして顔の見える「産直」関係を築いてきました



酪農ホームステイ



酪農生産者
相馬 慶生さん



酪農生産者 藤本雅夫さんとその家族

酪農は生きもの相手の仕事なので、予想できないことが起こります。それがあつらいどころではありません。不安な材料はたくさんありますが、ただ前進あるのみです。牛が病気になると辛い。日々勉強を重ねています

搾乳牛80頭、出産を控えた40頭を家族4人で育てている。グリーンコープとの関係は30年以上

「食事をしたあと、食器を洗うのと同じだから」と食べ残した餌をその都度きれいに掃除するようになった息子さん夫婦は子牛の世話もしている。朝夕の搾乳のあと、仕事の無い時間でも牛舎にいらるよう心がけているので、牛たちの食欲や健康状態もすぐに分かるとのこと。常に牛舎の衛生管理には気を配っている



グリーンコープとおつきあいは20年以上にもなります。酪農の難しさは、何と言っても相手が生きものということ。特に牛は夏の暑さに弱い動物なので日頃の体調管理が欠かせません。今年33歳になる息子が牛たちの世話、牧草の植え付けや収穫作業などのほとんどをやってくれるようになりました。

良質な原乳を作るには飼料のよしあしが影響します。non-GMO飼料に切り換えて10年になります。当初は乳成分が安定しなかったり、繁殖がうまくいかず苦心したこともありました。しかし、牛の生理を考えた根気強く取り組み、今では「安心して子どもたちに飲ませられる牛乳がほしい」という組合員さんの声に応えることができるようになったと感じています。

酪農家にとって飼料価格の高騰は大打撃です。何らかの対策をしなければと地域で飼料の大半を占めるトウモロコシを自家栽培しています。乳等省令で定められている乳成分と乳質をクリアすることはもちろん、これからも酪農のプロとして常に緊張感を持ってチャレンジしていきます。

産直びん牛乳を利用し 生産者そして日本の酪農を 応援しましょう

びん牛乳誕生物語

殺菌方法にこだわる

「牛乳は沸騰させていいの？高温殺菌はせっかくの栄養分を損なってしまう」「どんな人が作っているのだろう」。高温殺菌された牛乳が商品として横行する中の素朴な疑問が出発点でした。それから、ほんものの牛乳を探す旅がはじまりました。

母牛から搾られたお乳は人の身体にはよくない菌が含まれているために殺菌が必要。そこで採用したのが、風味や栄養をそのまま残すことができるパスチャライズ殺菌でした。1985年、より自然なカタチの牛乳が実現しました。1988年にはノンホモパスチャライズ牛乳が誕生しました。

餌が母乳を左右する

母牛の餌がそのままお乳になるからと、餌にこだわりました。1998年トウモロコシなどの飼料をnon-GMO（遺伝子組み換えをしていない作物）に全面的に変更。それは日本で初めての画期的なことでした。健康な牛に安全性にこだわった飼料を給餌することで品質的にもう一段高いレベルの安心・安全な牛乳へとたどり着きました。

紙パックからびん容器へ

餌と飼育方法にこだわった自慢の牛乳を「びん容器に！」という20年前からの願いを実現するための試みが2002年9月にスタート。当時の日本にはびん牛乳を作る大規模なメーカーはなかったため、グリーンコープは自前で工場を建設することにしました。その工場に責任を持ってくれることになったのが日本ミルクコミュニティ(株)。グリーンコープの「生命を育む食べもの運動」に共鳴してくれたのです。日本ミルクコミュニティ(株)とグリーンコープの出会いがびん牛乳誕生の実現へと導いたと言えます。

組合員の思いが結集。「みるく出資金」と「利用予約」

グリーンコープ専用のびん牛乳工場は、日本ミルクコミュニティ(株)福岡工場の敷地内にあります。パスチャライズ殺菌機やびん容器への充填機、びんをリユースするための洗びん機など、普通の乳業メーカーにはない設備があります。2003年それらを含むびん牛乳専用工場建設のための「みるく出資金」を組合員に呼びかけた結果、5億円を超える出資金が集まりました。びん牛乳専用工場は組合員の財産です。また、利用予約をすることで生産者を支え、ずっと飲み続けていこうという立場を打ち出しました。

グリーンコープの食べもの運動の象徴として

「作っている人の顔が見えて子どもに安心して飲ませられる牛乳がほしい」というお母さんの思いがグリーンコープのびん牛乳誕生の原点です。そこに集う組合員の願いの結集として、約20年の歳月を経て、約33万人の組合員の協同によってやっと登場したのがびん牛乳です。価格はもちろんびんの形態やびんに描くデザイン画、キャップの材質まで、1年かけて組合員がいていないに検討して決めました。びん牛乳はさまざまな困難な課題を克服し、グリーンコープの食べもの運動の象徴として開発され、存在し続けています。

酪農生産者の原乳生産を安定的に支えるためには、消費者・組合員が牛乳の消費について、年間をとおして予約すること、その予約の履行に責任を負うこと、がどうしても必要であると考えます。びん牛乳の開発にあたって、「予約」を制度の基本に据えた上で、予約価格と自由注文価格を設け、10円の差をつけることで利用をすすめてきました。

また、土曜日午後の配送を実施するなど、生き物である牛から毎日生産される生乳を無駄なく平準的に消費するための環境を整えてきました。そしてこのたび、びん牛乳の組合員価格に「生産奨励金」を加算し組合員から酪農生産者に「生産奨励金」を直接届ける仕組みを構築することにしました。今後より一層、酪農生産者との産直関係を作り上げていくことになります。酪農を巡る状況が厳しい中で、グリーンコープのびん牛乳の原乳生産者は2008年度、現在の44戸から約50戸に増える予定です。それに伴って、グリーンコープのびん牛乳の原乳が、これからは安定・継続して生産されることになります。また、その酪農生産者が酪農を継続でき、その結果として、私たちは「びん牛乳」を今後10年後、20年後、私たちの子どもたちの時代にも安定して飲み続けることができようになるように努めます。



開さんと母牛になったリリー

開牧場で生まれた「リリー」はグリーンコープのカタログGREENやチラシに登場した牛。未熟児だったリリーは開さんの愛情をいっぱい受けてすくすく育ち、立派な母牛に。毎日しっかりお乳を出している

リリーの子ども。名前はまだない



愛情いっぱい育てると
牛たちはちゃんと応えてくれます

熊本県菊池地域農協 酪農生産者 開 正文さん

乳牛を飼育する上で一番大切なのは、「あたりまえのこと」をすることです。それは自分の子どもを育てるように牛と向きあうことです。どの牛にも愛情を注いで育てたいのですが、仔牛の段階で淘汰しなければならぬのがとても辛い。お乳を出さない牛を飼育することはできないのです。

昨年から牛の飼料代が高くなつて酪農現場は大変ですが、これは安さばかりを求めてきた酪農が正常になるチャンスかもしれません。牛は草を食む動物、自分たちで餌を作って牛に給餌する、という本来の飼育のあり方を考えていくきっかけにしたいと考えています。

酪農ホームステイでは子どもたちが牛の世話を体験してくれます。組合員と生産者がお互いに顔の見える、信頼しあえる関係を築く、それが「産直」のすばらしいところですね。